

---

# 縮小世界

あるれん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

縮小世界

### 【Nコード】

N1377F

### 【作者名】

あるれん

### 【あらすじ】

人間は縮小できる　天才科学者の恋人が完成させた人体縮小理論。その被検体となった主人公は、縮小された自分と世界の間を横たわる、底知れぬ狂気に気付く。

人間は縮小できる　彼女、蕪谷絵美がこの突拍子も無い理論を完成させたのは、今から二年前、僕と彼女が二六歳の時のことだ。ここで言う縮小とは、社会学のような意識や観念的な、精神の及ぶ範囲としての人間の縮小を示すものではない。文字通り物理的に、一七〇センチメートルからの人間が小さくなるのだ。まるで、昔のファンタジーに登場する小人のように。

僕は根っからの文系人間だ。本棚に並ぶのは所謂純文学……彼女が大嫌いな部類の本ばかりだ。好きな作家を三名挙げると訊かれたら、スタンダールとツルゲーネフ、それにトルストイと答えることにしている。間違ってもアイザック・アシモフやH・G・ウェルズの名を挙げることはしない。正直に言うと、あの手の本は読んでいて頭が痛くなる。僕に言わせれば、どれもこれも人間を描くよりも世界を描くことに執心しすぎていて、つまらない。小説は人間を描くためにあるのだと、僕は思っている。所詮は嘘の羅列で読者を騙しているだけだ、と思うと手に取る気にもならない。

もう一つ正直に言うと、僕はサインとコサインの区別もつかないような人間だ。でも、それを恥じるつもりは無い。数学好きの友人の八割は、名誉革命とフランス革命の区別も付けられず、かつそれを恥じていないのだから。

小学生の時からトレンディドラマやサスペンスばかり観ていたため、僕はテレビアニメやヒーロー物の類をロクに見たことがない。だから二年前のあの日、僕の恋人であるところの彼女、蕪谷絵美が最初にこう言ったとき、僕は面食らうしかなかった。

「高橋くん、『ウルトラQ』の一七話を知ってる？」

「ごめん、全く知らない。なにそれ」

「じゃあ、『インナースペース』とか、『ミクロの決死圏』って映

画を観たことはある？」

「見たことない。聞いたこともない」

「キミ、最低」

「そりゃ酷い。心外だ」

彼女はともかく、僕はそういった類のエンターテイメントが余り好きではない。だからといって最低呼ばわりされるのは気に入らないが、この「キミ、最低」というのは彼女の常套句なので、もう気にならなくなった。

「サイエンス・フィクションってさ、嘘に適切な理由をつけて信じさせているだけだろう？ 余り好きになれないんだ、そういうの」

「キミの好き嫌いはどうでもいいの。黙ってあたしの話を聞いて」  
ファミリールレストランの安っぽい机を叩き、彼女は言った。休日の午後だったので、店内は混み合っている。近くにいた家族連れや男性数人のグループ、カップルが一斉にこちらを向いた。痴話喧嘩だと勘違いされているなら、実に心外だ。

「『ウルトラQ』の一七話のサブタイトルはね、『1/8計画』。当時の日本では、人口増加が社会問題化するんじゃないかという懸念があったの。今じゃ人口は減少してるし、思いつき杞憂だけだね。それでね、この話では文字通り八分の一に人間を縮小する技術が確立されてて、人口問題や食糧問題を解決しようとするの」

「ふうん……」僕はとりあえず相槌を打った。

「何よ、気の無い返事ね……まあいいわ。それで、『ミクロの決死圏』の方はそういう社会派じゃなくて、どっちかというところエンタメ寄りの話ね。暗殺未遂で脳内出血を起こした重要人物を救うために医療チームが潜水艦みたいなのに乗って縮小光線を浴びて、体内に潜って手術をするの。でもコレが一時間しか持たないのよ」

彼女はその手の空想科学に惹きつけられて科学の道を志し、今ではアメリカの科学雑誌に論文が掲載される程の科学者になった。しかも二六歳という若さでだ。片や僕は、同じ二六歳でも、三流企業に勤めるしかない会社員。ゲーテもカントもキルケゴールも、試験

の、ましてや就職活動の役には立たないことを僕は証明してしまっ  
た。

二六にもなつて特撮の話をする人間というのもどうかと思うが、  
彼女は僕よりも、属する世界が違うとはいえ絶対的に優秀だ。だか  
ら僕は彼女の趣味に口出しすることは無い。

「で、それがどうしたのさ」癩だな、と思いながらも続きを促す。

「うん、高橋くん、この二つの作品の共通点は何だと思う？」絵美  
は楽しそうに笑って言う。

「……人間が小さくなること？ と、どうかそれ以外思いつかない。  
クイズとしては三流だね」

「やっぱりキミ、最低。まあそりゃクイズのつもりじゃないし。賞  
品とか無いし、簡単だけどさ。だからって三流は無いんじゃない？

口は災いの元って諺、知らないの？」

「君が言いますか、『舌禍の女王』蕪谷絵美くん」

これは、学生時代の彼女の異名だ。致命的、神懸りのでさえある  
口の悪さで絵美は学生から教授に至るまで、ありとあらゆる人種の  
反感を買い、終いには大学を中退し姿を眩ました。このとき、弱冠  
二〇歳。

そして五年後、突如として舞い戻ってきた彼女は僕を呼び出し、  
海外で取得したという三つの博士号を見せ付けたのだ。書かれてい  
た大学の名は、海外のものでありながら日本人の八割が名を知って  
いるレベルの、平たく言えば世界最高峰との誉れ高いものだった。

そういえば、そのとき僕が呼び出されたのも、このファミリール  
ストラップだった。

「それはいいの。過去は過去。あたしは、そういうことをさらっと  
水に流せるジャパニーズなのよ……まあ、それはともかく」こほん  
と彼女は小さく咳払いをした。「フィクションの中でしかなかった  
この『人間を縮小する』技術を、実現出来そうなのよ。少なくとも  
あたしと、チームのみんなは出来ると確信してる」

「……本当に？」

「こんな嘘は吐かないわよ」

「本当だとしても、どうやって？」

「……言っても高橋くんに分かると思えない」

「掻い摘んで。基本的な理屈だけでも」

そんな嘘みたいなことが現実になるだなんて信じられない。僕の嫌いなサイエンス・フィクションそのものじゃないか。分からなくてもせめて納得しなければ、僕は収まりそうに無かった。

「じゃあ、基本的なところだけ……」

そう言つと、彼女はおすおすと語りだし、やがてそれは止めようのない熱弁へと変わった。

生体の機能は、相互に補完しあうことが出来る。例えば脳だ。外的要因で一部の機能が欠損しても、他の部分がそれを補うことで機能を回復させるといふ例が多数存在する。損傷を受けた右脳の言語機能を左脳が請け負うことや、或いは逆に、左脳の論理思考を右脳が肩代わりするといった現象は、今日では一般に起こり得ることとして認識されている。

もっとミクロなレベルで言えば、遺伝子がある。ある細胞の遺伝子の塩基配列に異常が生じるというのは、極めて日常的に発生している現象である。DNAの複製は正確無比に行われるイメージを持たれがちだが、これは誤りだ。転写過程で数限りないミスコードが生じるのが普通なのだ。生体には、これらのケアレスミスを修復する機構も多数備わっている。だが、全てのDNA、RNAが完璧な状態で機能しているかといえば、否だ。

このように、我々の身体の遺伝子には日常的に多数の異常が発生している。にも関わらず、我々は何の問題もなく、健康な生活を送っている。何故か？

「相互に補完しあっているからよ」彼女は言った。「不完全な存在同士が互いを埋めあうことで、あたしたちの身体は完全な機能を獲得してるの。遺伝子は一つじゃない」

成程、と僕は頷いた。

「で、ここからが本題なんだけど……って何その顔」

余程僕は酷い顔をしていたのだろう。確かに、もううんざりというのが正直なところだった。加えて、僕はポーカーも麻雀も下手糞だ。ババ抜きですら勝てた試しが無い。

そこからの彼女の話は、今までに輪をかけて平易に、簡潔になった。僕に気を遣ってくれたのだろうか。だとしたら、明日は天変地異が起こる。振り向いた人間が片っ端から片栗粉の柱になるうとも水道から日本酒が出てこようとも驚かない。絵美は本来、何事に関しても、僕なんかに関わらず突っ走っていくタイプだ。

人間の機能は最適化出来るのではないかと絵美と彼女のチームの人々は考えた。生体は相互に補完しあっている。裏を返せば、安全機構としての無駄な部分が極めて多い。遺伝子の話に戻すなら、AGTCの四種で定義される塩基配列には、何のタンパクもコードしていない部分が多数存在する。発現しない因子もある。これらは一人の人間が生きるためには不必要な物だ。最も複雑な器官である脳だって、一部が欠損しても問題なく機能するのだ。

パソコンが余計なプログラムを消して動作を早くするように、人間にも同じことが出来るのではないかと。補完しあう必要の無い、異常の無い部位だけを取り出し再構築し、最適化された人間を作ることも出来るのではないかと……。

「理論は完成してるの。予算とスポンサーも確保した。後は機材を組むだけ。また一つのフィクションが現実になるのよ！」

彼女は一気に話すと、すっかり冷め切ったコーヒーを一気に飲み干した。熱した頭は冷えただろうか。

僕も彼女に倣って、遙か昔にウエイトレスが運んできたコーヒーを飲む。同じく冷め切ったそれは、断頭台に流れた血液みたいな味がした。缶コーヒーの方が余程美味しい。キリンのファイアなら、尚良い。

カップをソーサーに戻すと、僕はふと浮かんだ疑問を口にした。

「で、誰が小さくなるの？」

「キミよ」事も無げに彼女は言った。

「僕？」

「そう、キミ。高橋光之くん」

道理で、と僕は膝を打った。絵美が僕に気を遣うなどという、アメリカ合衆国大統領暗殺計画の成功確立を遥かに凌駕するレア・ケースが発生したのにはそういう裏があつたわけだ。天変地異はそう簡単には起きないらしい。

「本当ならあたし自身が行きたいんだけど……チームのみんなが許してくれなくて。失敗の確立なんて、ありとあらゆる統計手法を使つて、どんなに悲観的な数値をピックアップしても○に近似出来るのに……」

「そりゃそうだ。当たり前だよ、蕪谷博士」

「かといつて、チームの誰かを行かせるわけにはいかないの。情報漏洩を防ぐために少人数でやったのが仇になって、一人でも欠けたら実験が立ち行かなくなっちゃう。みんな替えが利かない生粋のスペシャリストばかりなのよ。あたしは割とマルチタレントだから、抜けてもどうにかなるんだけど」

「だからって、どうして僕が？ 治験みたいなものなら、公募するとか……」

「それは絶対に駄目。人間の縮小実験なんて、社会的影響力が強すぎる。スポンサーがお金を出してくれたのも、秘密裏に行くことを前提としてだもん。そんなこんなで結局あたしが選ぶことになって、それでね、チームのみんなに言われたんだ……」

彼女は空になったカップを両手で包んだ。

「どうせ選ぶなら、お前の一番大切な人にしろ、って」

思考静止した僕の前で、彼女は耳まで真っ赤にして俯いた。そのまま僕は、ウエイトレスがコーヒーのお代わりを注ぎに来るまで沈黙し硬直していた。

カップに再び湯気が戻り、彼女が言った。

「高橋くん」



「何？」

「な、なんか言ってくれたってよかったじゃん」

「ごめん、余りの出来事について……」

「キミ、最低」

常套句を吐き捨てる、絵美は明後日の方向を向いた。機嫌を損ねたらしい。

とはいえ、彼女の不機嫌上機嫌に関わらず、僕はこの話を受けるつもりになっていた。あんなことを言われたら断れないというのも勿論ある。だが、それと同じかそれ以上に、僕はフィクションの世界、虚構と現実の入り混じる場所を体感してみたいと思った。

空想科学とは嘘の羅列ではなく、未来に起こりうる可能性の洞察なのだ、といつか彼女が言っていた。本物を知ればきっと、僕自身の偏見も消えるのではないか。彼女にもっと、近づけるのではないか。

半分の好奇心と、もう半分の下心。笑いたくなるほどに、僕は人間の男だった。

「分かった。僕でよければその依頼、受けるよ」

「本当に？　ありがとう、高橋くん！」　そう言って、彼女は伝票を取り上げた。「今日はあたしの奢り」

「明日は世界の終わりかな？」

「……やっぱ止めた」

「そりゃ酷い」

下心が透けていないことを願いながら、僕は言った。結局、二〇〇〇円とちよつとのその日のお代は、彼女の奢りとなった。

「そうそう、高橋くん」

「何？」

「世界は終わらないけど、キミの会社、多分三ヶ月以内に倒産するよ」

ありがとうごさいました、という間の抜けたアルバイト店員の声を聞きながら、彼女はとんでもないことを言った。

「嘘、マジで？」

「本当よ。キミの会社、言っちゃ何だけど地域密着型の中小企業でしょ？ もう殆ど経営は破綻しかかっているのに、地元の銀行から信頼だけで融資受けてるの。慣習ってやつ？」

「でね、その地方銀行に今度お上の検査が入るんだ。そんないいかげんな経営してるとどうしようもない金融機関だから、間違いなく潰れるわ。煽りを受けて、キミの会社も」

「……そんなバカな」

「大丈夫よ。生活の面倒はあたしが見てあげるから。それなりにお金もあるし」

溜め息を吐きながら、僕は彼女が経済でも修士論文を書いていたことを思い出した。

「選択肢は無かったってことか……」

「呟く僕の後ろで、今時珍しい蝶番の扉が滑らかに閉じた。

どこまでが嘘で、どこまでが現実なのか。嘘が現実になるのなら、現実は何になるんだ？

果たして三ヶ月後、僕の会社は現実に倒産した。

そして今、二八歳になった無職の僕は彼女の車の助手席から降り、都内に位置するとある研究機関の敷地内へと足を踏み入れていた。銀のベンツの座り心地は上々だった。彼女が隣にいるからかもしれないが。

「格好いいでしょ。蒔き菱も無ければミサイルランチャーも付いてないけど」

「何の話？」

「某国の機密諜報部員の話」

ドアの取っ手に人差し指を触れてロックをかけると、彼女は上機嫌で先を歩いていく。

そこは、部外者の僕には研究機関というよりは一つの街のようにも見えた。片側一車線は取れそうな幅の、アスファルト敷きの道路

の両脇に、平板な建物が並んでいる。道は碁盤の目状ではなく意図的にランダムな交叉を作っているらしく、彼女の後を付いていかなければ簡単に道に迷ってしまいそうだ。設計図の上を歩いているかのような錯覚を、僕は抱いた。

どの建物も窓が極端に少ない。研究を漏らさないためだとは思いますが、そのせいで酷く圧迫感の強い場所だった。すっきりと晴れた五月の青空だけが救いだった。

一〇分程も歩き、一つの建物の前で彼女は足を止めた。

「ここ。IDは忘れてないよね？」

「大丈夫」

「OK。じゃあ行こう」

事前に絵美から僕の顔写真入りのカードを渡されていた。かざすタイプやアナクロなりーダを通す物でもなく、どこかに身に付けているだけで、ゲートの通過を認識してくれるものらしい。

「最近、大手の百貨店が試験導入したのと同じ物なんだ」彼女は言った。

「え？ デパートに入るのに個人認証が要るの？」

「そうじゃなくて、手ぶらで買い物が出るのよ。品物を受け取って、建物から出た瞬間に一齐に決済されるの。お店の一つ一つでお金を払う必要が無くなるってわけよ。まあ、入店記録とか管理されちゃうから、気味が悪いつて人もいるみたいだけど。心配することはないってあたしは思うんだけどね」

「うーん、僕は心配かな」

「管理されるのが？」

「いや、買い過ぎが」

「え？ 高橋くんがそんなに買い物をする姿を見たことが無いんだけど。モノに執着が薄い方でしょ？」

「僕じゃなくて、絵美の」

「キミ、最低」

不貞腐れて歩を進める彼女の後に続き、僕もガラス張りの自動ド

アを潜った。機械がどこにあるのかは全く分からない。認証の電子音が鳴るかど期待したが、全くの無音だった。

銅像みたいな警備員を除けばまるで人気がない、黒い大理石調のエントランスを抜け、エレベータで階下へと降りる。彼女の押した表示は『B3』だったが、地下三階にしては長すぎる距離を降下しているように感じた。

長い間に戸惑い僕があちこち見回していると、彼女が言った。

「実は今、生体認証してるんだよ。気付いた？」

「え？ でも僕はどこにも触れてないから指紋とか取れないし、虹彩認証しようにもレンズを見てないし、掌の静脈だって……」

「気になる？ 気になるよね？」

いや、別に、などと言おうものなら殴り倒されそうな勢いで彼女は言い、エレベータの壁にある、金属板同士の僅かな隙間を指差した。

「こことね、あと三箇所の建材の隙間からレーザーを照射して、このエレベータに乗った人の顔を三次元認識するの。それで、予め登録された顔でなければ扉が開かないってわけ。誰かがもし万が一、間違っってこの地下三階のボタンを押しちゃっても、あたしたちの研究室には辿り着けないって寸法よ。アメリカの銀行の貸金庫より進んでるシステムなの。凄いでしょ？ 瓜二つの双子の顔だっって見分けられるんだから」

「凄いけど……レーザーって危くないの？」

「それ偏見よ。レーザーが泣いてるわ」

チン、と電子レンジみたいな音が鳴ってエレベータが停止し、扉が開く。

「ようこそ、『S13』へ」

先に立つ彼女に誘われ、僕は実験区画『S13』へと足を踏み入れた。

室内に入るなり、僕はチームの一人に錠剤を渡され、すぐに飲む

ように指示された。オレンジとも赤とも付かぬ毒々しい色だったが、気にしないことにして、絵美の差し出した硬度の低そうなミネラルウォーターでそれを飲み下した。

存外に広い室内を見回す。僕が見たことのある実験室と名の付いた物は、いずれも学校の一教室だったが、当然それとは比べ物にならないほどの設備が整っている。一〇台は下らない数のコンピュータが横長のデスクの上に並び、延びた配線が、丁寧にワックスをかけた板張りの床を埋め尽くしている。

一方の壁は上半分がガラスの出窓になっていたが、今はシャッターが降りていて向こう側は見えない。モニタやマイクも据付けられていて、そこだけスタジアムの実況席を切り張りしたかのようだ。他の部屋に繋がるであろう扉は複数あり、中にはバイオハザードや放射線被爆の危険を示すシンボルが貼り付けられている物もあった。それぞれが各分野のスペシャリストだと彼女は言っていたので、個々人の研究スペースだろうか。

紹介された絵美のチームは総勢五名で、男性が三人、女性が二人。日本人は彼女一人で、男性の一人は痩せた背の高い中国人、一人は歯が異様に白く感じるほどの、最近では滅多に見なくなった生粋の黒人だった。

もう一人の女性は彫りの深いブロンド。あと一人の男性はジャクソンと名乗り、妙にフレンドリーな、絵に描いたようなアメリカ人だった。

握手をするなり、彼は大仰なジェスチャーで言った。

「君が噂のボーイフレンドか。いやあ、敷地に入ってから君らの事をずっとモニタリングしてたんだけどね……エミがあんなに喋るところ、初めて見たよ」

「そうなの？ いつもあんな感じだけだ」

彼に合わせて、不得意な英語で僕は応じた。察するに、絵美にあんな歯が浮くようなことを言わせた原因は、この陽気で気さくな彼にあるのだろう。ああ見えて、彼女は人の言うことを信じやすい、

真に受ける傾向にある。

「そうさ。何せエミ・カブラヤはロング・ブルネットの寡黙な東洋美女。その卓越した頭脳で世界を席巻する若きクール・ビューティ……俺たちの間じゃ『サイレント・クイーン』なんて渾名されてたんだぜ？」

「そうなんだ……それは意外だな」

『舌禍の女王』が凄いで世だ。当の絵美はというと、真っ赤になつてジャクソンを窘めていた。僕よりも、遥かに流暢な英語だ。

むくれる彼女を宥め、僕はジャクソンに訊ねた。

「モニタリングつて、どうやったんだい？」

「どうやったもこうやったも無いさ。この施設には至るところに監視カメラやら集音機やらが設置されてる。死角はこの『S13』区画と、トイレ以外に無いと言つても過言じゃないぜ。後はその端末からちよちよいと、ね」彼はコンピュータを親指で指して言った。

「ヤンの得意分野さ」

部屋の奥でキーボードを叩いていた、背の高い病的なまでに細身の中国人が、ニヤリと笑つて僕にピースサインを向けた。

「凄いね……何でそこまで？」

「いやあ、産業スパイやらジャーナリストやらが煩くてね。ここの予算の不自然な流れを嗅ぎ付けたらしいんだ。で、秘密裏に一体何を研究してるんだって探りを入れてくる人間が多くてさ。君を今日の今日までここに呼ばなかったのも、エミ以外のメンバーと接触させなかつたのも、全部情報漏洩を防ぐためだったんだ」

成程、と僕は応える。

その直後突然、足がもつれ視界が横転した。

「高橋くん!？」

頭上から、狼狽を隠さぬ絵美の声がする。どうやら僕は床に倒れたらしい。後頭部に、床を這うケープルのごつごつした感触がある。だが、どちらが上なのか下なのか、自分がどういう向きに立っているのかがまるで分からない。深い海の中を漂っているような気分だ。

った。

「薬が効いたみたいだな」落ち着いたジャクソンの声。「ミツユキ、意識はハッキリしてるか？」

「うん。頭の中は至ってクリアだよ。ちよつと耳鳴りがするけど」

「よし、完璧だ。コイツは人間の三半規管だけを選択的に麻痺させる薬物だ。平衡感覚が無くなったり、回転を感じなくなるんだ。無重力空間にいるときみたいな感触はずだぜ。いやあ、ヒトでの治療は行いうわけにはいかなかったし、効かなかったり効きすぎたりしたらどうしようかと思っただぜ」

「どうしてそんなものが必要なんだ？」

「それはあたしが答えるわ」絵美の顔が僕を覗き込んだ。「キミには説明しなかつたけど、人体縮小には、特殊なパターンの磁場の中でかなりの遠心力でキミの身体を回転させなきゃならないの。もし素面でやったら、キミの精神とか感覚とかがおかしくなっちゃう。下手すると正気を保てないのよ。そのための処置ね。手術でメスを入れる前に麻酔を受けるような物だと思えばいいわ」

「この薬、化学構造は麻薬に似てるんだが依存性は無いから安心しな。副作用や後遺症も無い……もつとも動物実験の段階では、ただけどな」

「どつちにしろもう飲んじゃったし、仕方ないよ」

「OK、その意気だぜ。効き目が切れないうちに実験を開始するとしよう」

ジャクソンは言い、絵美が全員に号令をかける。まともに歩けない僕は男三人に抱きかかえられ、先程実況席のように見えたところのすぐ脇の扉の中へと担ぎ込まれた。

内部は真っ暗だった。椅子が一脚あるだけで、僕はそこに座らされた。時折、元いた部屋から差し込む明かりが壁面の銀色の部品に跳ね返り、部屋の大体のサイズは把握できた。手を伸ばせば、両方の端に触れられるくらいの狭さだ。壁は緩やかに湾曲している。

「すぐに済むから、ちよつと我慢してね」

耳元で、日本語に戻った絵美の声がする。彼女の手が手際よく、僕の身体を椅子に縛り付けた。両腕両足が革で裏打ちされた金属のリングで固定され、腰と両肩からたすき掛けに革のベルトで巻かれ、そうそう簡単には抜けられそうに無かった。

「それじゃあ頑張つてね、高橋くん。キミは人類がまだ足を踏み入れたことの無い、新たなフロンティアを開拓するの。ガガーリンやアームストロングみたいな、後の世に語り継がれる気の利いた台詞を期待してるわ」

それだけ言い残し、彼女は部屋を出て扉を閉めた。完全な暗闇だけが残った。遠くから、実験開始を告げる声がある。平衡感覚の無い暗闇というのは、殆ど宇宙空間そのものなんじゃないか、と僕は思い立つ。どこかで機械の駆動音がする。

奇妙な感覚が湧き上がってきた。絶対に手の届かないところを擦られているような、腹の臓器の中を爪楊枝で引っ掻いているような、不快でも快感でもない中途半端な感覚。次第に、そもそもそれを感じているのかいないのかも曖昧になってくる。何かが、僕の中から加速度的に乖離していく。

そしてある一点を境に、僕の感覚は完全に消滅した。視覚は暗闇、聴覚は無音、触覚も嗅覚も麻痺し、口の中は何の味もしない。そもそも、口と舌があることが認識できない。五感以外にも、平衡感覚だけじゃない、ありとあらゆる感覚が全て沈黙していた。時間が流れているのか止まっているのか、はたまた遡っているのかすら分からない。今僕がいるこの場所が現実なのか、分からない。

落ち着け、落ち着けと僕は自分に言い聞かせる。それでも、現実の手の届かない闇の中へと墜ちていった。

次に意識を感覚出来たとき、僕は素裸でコンクリートの床の上に倒れていた。ゆっくりと身を起こす。身体に異常は無い。少なくとも、身体機能には。すぐ脇に僕の着ていた服が畳んで置いてあったので、いそいそと着込んだ。



辺りは薄暗く、天井の低い、ガレージのような一方の壁が無い建物の中のようなだった。丁度真上に、一人が通れるくらいの穴が開いている。あそこから落ちてきたのだろうか……と、考え、ようやく自分が縮小されたのだということを出した。実験は、成功だったのだろうか。辺りに人の気配は無い。

遠くの方から微かに物音が聞こえる。この建物の、開放されている方面からだ。とりあえず、そちらの方面に歩みを進めてみることにする。僕の身体の縮小が成功したのか否かは、相对比较しないと分からない。僕が一人だけでは分からない。

建物の外へ出ると、そこは何の変哲も無い繁華街だった。地方都市の一角に必ず存在する、取って付けたような賑わいを見せる地域だ。しかし、決定的に違うことがある。人の気配がまるで無いのだ。ゴーストタウンか、撮影のセットみたいだ。だが、存在する物は僕が見る限りどれも本物で、作り物のようには見えなかった。

そこへ、背後の頭上から声が降ってきた。

『高橋くん！』

「……絵美？」

振り向くと、巨大なガラス張りの壁の向こうに、巨人と化した絵美の姿があった。マイク越しの声はやや不明瞭だが、聞き取るのに支障は無い。成程、実況席のように見えた場所は、こうやって縮小された僕を観察するためだったのか、と納得する。

僕が出てきた場所には、平らな板の上に卵型の構造物が宙に固定されていた。つまり僕はあの中に入り、縮小され、下に落ちてきたことになる。

『よっしゃあ！ 実験は成功だぜ！』

ジャクソンの声。続いて、チームの人々が一斉に歓声を上げた。彼らもまた、僕から見れば途方も無い身長の人に見える。僕は、確かに縮小されたのだ。

『それじゃあ高橋くん、小人になった感想は？』満面の笑顔で絵美は言う。

気の利いた台詞を期待している、という彼女の言葉を思い出す。何か偉人の格言を揆ろうか。それとも素朴な一言の方が印象に残るだろうか。それこそ『地球は青かった。国境線は見えなかった』、のような。

丸々一〇秒は悩んだだろうか。だが、僕の頭には何一つとして、それらしい台詞は浮かばなかった。頭が働いていないわけではない。確かに脳は全力で稼働しているのだが、まるで霞を掴もうとしているかのように思考が空振り、何も出てこないのだ。

『何か言つてよ、高橋くん。ソヴィエトの犬たちにも吼えることは出来たのよ?』

「ごめん、絵美。それらしい台詞は思いつかないよ。ただ、凄いな」仕方なく僕は言った。「とにかく、凄い」

『何よ、芸が無いわね……まあ、キミらしいといえばキミらしいんだけど』

またしても、キルケゴールは役立たずだった。

『まあいいわ。実験を第二段階に移行するから、この街を歩き回ってみてくれない?』

「え? 歩き回るって……そんなものが第二段階なの?」

実験というからには、縮小した僕を使つてもつと様々なことをするものだと思ひ込んでいた。モルモット宜しく滑車の中を走り回ったり、医学検査をしたり。僕の身体を検証することよりも、何の変哲も無い街並みの中を歩き回ることが、大きな意義を持つのだろうか?

『ええ。大事なことなの。軽く、いつものように散策するだけいいから』

彼女の口調にふざけた感じは無い。分かった、と頷き、僕は歩き出す。

無人の街は少し気味が悪い。これらが全て、今の僕の二〇センチメートルと少しの体に合わせて作られた物だとは信じられなかった。コンビニエンス・ストアに並ぶ品物も、街灯の柱にチェーンで括り

つけられた放置自転車も、本物にしか見えない。だが、人がいないということ以外にも、とてつもない違和感の原因になる物があることを、歩き出して数分で僕は発見した。

街路樹が無いのだ。雑草の一本も無い。人だけじゃない、野良猫も植物も昆虫も、あらゆる生物がここには存在しない。僕という人間を除いては。

街は幾つもの道路が入り組んでいる、決して単純ではない構造だ。だが、細い路地は無い。どれも幅の広い、歩道まで整備された道路だった。

幾度か角を曲がった。無人の街のウィンドウ・ショッピングは、楽しくはないが決して嫌では無い。大型書店、ハリウッドの大作のポスターが貼られた映画館、意図が分からない雑貨屋。生物がいなのは確かに異様だが、慣れか順応か……一種の安らぎのような感情を、僕は抱き始めていた。この世界は、今の僕にはすこぶる相応しい。

『高橋くん、聞こえる？』

「ああ、聞こえるよ」

絵美の声はマイクで拡張され、この街中に響き渡っている。僕は別段大声で話しているわけではないが、ちゃんと伝わっているらしい。

『高橋くん、今いる場所から最初にいた場所へ、戻れる？』彼女が言った。

僕は方向音痴ではない。初めての街でも一度歩けばすぐに地理を把握できる類の人間だ。世の中にはそうでない人も割と多くいるので、密かに自慢している、僕の数少ない特技の一つだ。だから、僕は簡単に応えた。

「うん、分かった。戻るだけならすぐだよ」

簡単なことだ。元来た道をそのまま引き返せばいいのだ。この街の構造は意外に複雑で、抜け道などは無さそうだからショート・カットは出来ないだろうが、どこでどちらに曲がったかは明確に記憶

している。だから迷うはずが無い。

そう思って回れ右をし、一つ目の四ツ角に差し掛かったとき、僕は愕然とした。

道が分からない。右か、左か、直進か。全ての道の先に広がる景色に、見覚えがあるような気がする。背後を見ると、僕がいた場所が分かる。だが、行きの道でそこに至るまでどういう道筋を辿ってきたのか、全く分からない。

僕は頭を掻き毟る。思い出せ、思い出せと幾ら念じても、一向に浮かんでは来なかった。頭に掛かる霞が、更に濃くなる。思い出せないのは、道順だけか？ 違う。僕は何を見てきた？ 放置自転車、コンビニ、映画館、書店、雑貨屋……それだけか？ 他にもあるはずじゃないのか？

『やはり、ね……』予想通りだったのか、落ち着いた絵美の声がした。

「絵美！ これは、何なんだ？ 自分が何をしていたのかまるで思い出せない。コンビニがあつたのは覚えてる。でも、雑誌のコーナーが窓際にあつたかどうかは思い出せない。映画館があつたのは覚えてる。でも、上映中のタイトルは思い出せない。それ以外にもいろいろなものがあつたはずなのに、全然思い出せない。何かとても変な気分だ。全部の景色に見覚えがあるけど、思い出そうとすると何も浮かばない。頭の中で、思考に枷を付けられているみたいだ。教えてくれ……僕は一体どうなってしまったんだ？」

『予想はしていたけれど、確証は無かつた……でも今はとりあえず、コーヒーでも飲んで落ち着かない？』

「落ち着けないよ！ こんな……僕が僕で無いみたいだ」

『ごめん、言い方が悪かつたわ。コーヒーを飲んでもらえば、確証が得られるの。キミの左手に、自動販売機があるでしょ？』

言われて左を向くと、確かに清涼飲料の自動販売機があつた。

『お金を入れる必要は無いから、幾つか飲み比べてみてくれる？』

一応、国内大手三社のブランドを揃えてみたから』

「飲み比べ？　こんなときに何だつてそんな……」

疑問はあったが、これにもきつと何かの意味があるのだろう。僕はボタンを押し、キリンとサントリーのコーヒーを一缶づつ取り出した。

僕は缶コーヒーに一定のこだわりがある。キリンのファイアが好きで、サントリーのボスが大嫌いだ。舌に残る滓が気に食わない。コカ・コーラのジョージアは両者の中間だ。そういうことを知っているから、彼女も僕にコーヒーを飲ませることを思いついたのだろう。

プルタブを開け、一口づつ口に含み、味を確かめた後飲み込む。ファイアとボス。普段ならば、一口飲んだだけで判別できる自信がある。だが、今の僕が飲んだらどうなるか、既に予想は付いていた。

「……同じだ。味の違いが、まるで分らない。違うのはパッケージだけ。絵美、これの中身は？」

「小さいけれど、真正銘の本物よ」

「くそっ！」

僕は中身の残っている缶を、路上に叩きつけた。茶色い染みが舗装道路に広がっていく。

「……縮小されたことで、身体は最適化される、と言ったわね？」  
彼女はゆっくりと語り始める。『今のキミは余計な部分が全く無い、純粋で完璧な人間なの。遺伝子の一つ一つからね。だから、多分キミの子供はキミと極めて似通った姿形になる。発現しない、情報として蓄えられているだけの要素は全て排除されるの』

「そんなことはどうでもいい！　僕は、どうしてこうなったんだ！？」

『恐らく、キミの感覚も縮小したのよ。目の前の事物を正確に理解する力が衰えている。コーヒーというならば、カフェオレとブラック無糖、ブレンドの区別は付いても、挽き立て工房とレインボーマウンテンの区別は付かない。街並みの断片的記憶はあっても細部は

思い出せず、元来た道に戻ることも出来ない。感覚が弱化して、精神は大人なのに幼い子供のような体験をする。まるで……』

彼女は一つ、間を取る。僕は生唾を飲み込む。

『まるで、夢の中に、物語の中にいるみたいでしよう？』

フィクションが現実になる、と彼女は言った。僕はそれを言葉通りに受け取っていた。だが、そんな美しい物ではない。これでは虚構と現実の溶け合わさった、混沌そのものだ。

もう何が何だか分からない。分かるうにも、乏しい感覚は何も教えてくれない。

『大丈夫だよ、高橋くん』彼女の声がする。『あたしたちはちゃんと、キミのこと見てるから』

「だから何だつて言うんだ！ 気味が悪い、こんなの」

僕は自分が投げ捨てた空き缶を見た。見た目は、完全に元のサイズの物と同じだ。中身は同じ物を注入することは出来ても、缶まで完全な縮小品が出来るとは考えづらい。だとすると、これは感覚が弱化した僕が『元と同じ物』と認識しているだけで、縮小前の僕が見たら模型にしか見えない物、ということか。

この街も同じだろう。極めて自然に見えるが、僕がそう認識しているだけで、作り物なのだ。だが、そう理解したうえで改めて見回しても、精巧なジオラマの中にいるとは思えなかった。だからこそ気味が悪くて仕方ない。今僕が着ている服だつて同じだ。

さつきは、この世界は今の僕にすこぶる相応しい、と感じた。だが、今はそれをはつきり否定できる。なぜなら、振り向けばガラスの向こうに元の大きさの絵美がいるのだ。彼女は僕を見ているのだ。だから僕は相対的な異常を認識できている。

もしも、あそこがガラス張りでなくて、空色にペイントされた壁だったら、僕は壁だとも分からず、この気味の悪さを感じることも無かっただろう。当然の物として、当然の認識をして、この縮小世界を現実として受け入れるだろう。

相対的に大きな世界が確かにあることを、超越者の存在を僕は知

っているから……。

思考することを拒絶する頭を無理矢理働かせてそこまで考え、僕は不意に、一つの仮説に思い当たった。

「元の世界も、この縮小世界と同じなんじゃないか……？」

僕たちは今まで、何の違和感も覚えることなく時が流れるままに日々を現実として過ごしてきた。だが、それが認識の相対的不足を孕んでいるとしたら？ 元の世界とは、縮小世界でいうところの、窓を空色ペイントの壁に置き換え、天の声をシャットアウトした、コーヒーの味が同じことに違和感を感じることに無い、感じることに出来ない状態と同じなんじゃないのか？ つまり、もしかしたら元の世界も、相対的により大きな世界の縮小に過ぎないんじゃないのか？

「そんなはずあるか！」

僕は言下に否定する。そんなもの、認めるわけにはいかない。超越者？ 今の僕と絵美の関係を元の世界に当てはめたら、一体そこに何がいるっていうんだ？ それは、神か、或いはそれに類する物の存在を認めることになる。僕の嫌いな、嘘の塊そのものじゃないか。フィクションはフィクションであればいい。嘘と現実が入り混じっちゃいけないんだ。今僕が感じているような混沌が、元の世界にも存在するなんて、認められない。

『高橋くん？ 大丈夫？』

「絵美……」

『どうしたの？ さつきからキミ、様子が……』

「僕を外へ出してくれ」

そうだ。認めるか認めないかわからない。実際に見てみればいい。相対的に大きな物、世界の存在を知覚することが出来るようになった僕が、元の大きさに戻って自分の眼で確かめればいい。これはフィクションなんだ。どうしようもなく滑稽な、サイエンス・フィクションの世界なんだ。神や仏なんて存在しているはずが無い。確かめなきゃならない。

『でも、実験はまだ……』

「そんなのどうでもいい！ 僕を今すぐここから出せっ！」

絵美は面喰らっているようだった。無理も無い。僕がこんな大声を出すのは中学生の頃以来だ。無論、彼女はその頃の僕を知らないでも、大好きな彼女を怒鳴りつけてでも、僕は確かめなきゃならない。何も無いんだ。何も無いに決まっているんだ。

『分かったよ、ミツユキ。実験は中止しよう』

『ジャクソン、でも！』

『実験と彼と、どっちが大事なんだい？ カブラヤチーフ』

ジャクソンに窘められ、絵美も渋々納得したようだった。彼女は実験中止の号令を掛け、すぐさま僕に指示を下した。僕一人では、道が分からないのだ。

一つ目の角を左折、三つ目の、コンビニエンス・ストアの角を右折。道なりに直進し、突き当りのＴ字路を右折。彼女の言うとおり進むと急に目の前が開け、最初に僕が出てきた、宙に浮く巨大な板の上に載った卵の前へ出た。

そのまま板の下を進み、最初の穴の下に辿り着く。そこでほんの数秒待機していると、突然身体が浮き上がり、穴の中へと一気に吸い込まれた。

戻るのはあつという間で、先刻のような奇妙な感覚も無かった。

転がっていた元の服を着直し、暗い小部屋を出る。足元がふらつくようなことも無い。大丈夫、僕は至って正常だ。

しかし、著しい疲労があった。数歩歩いただけで体中の筋肉が悲鳴を上げ、労働を拒絶する。それでも僕は、外に出なくちゃならない。

絵美に扉を開けてもらい、肩をジャクソンに支えてもらいながら三人でエレベータに乗り込む。滑らかな上昇。この鉄の箱にも、僕らの感覚では決して知りえない側面があるのだろうか。構造の隙間に隠れた顔認証システムなんかじゃなく、超越者の眼から見ればど



うみても杜撰な部分があるのだろうか。ここもまた、縮小世界なのだろうか。

「そんなはずは無い、違うんだ、ここは……」

「高橋くん、どうしたの？ 一体キミは、何を見たの？」

見たんじゃない。見ないことを確かめに行くんだ。だが、言っても理解されるはずは無いので僕は何も言わなかった。

また電子レンジみたいなき音を立てて、エレベータが一階に到着する。這うようにして出てきた僕の姿に警備員が反応したが、ジャクソンが眼で制した。

すぐ目の前に非接触型カードリーダー内蔵の自動ドアがある。ガラス張りだ。向こうには別の建物と、五月の青空。

絵美の肩に縋るようにしてそこを通り、空を見上げた僕は、短く悲鳴を上げた。

「高橋くん！？ 何、何なの？ 何が見えるの！？」空中を指差したままで硬直する僕の隣で、絵美が金切り声を上げる。

「……精神に失調をきたしたのかも知れない。」落ち着き払った声でジャクソンが言った。「縮小された自分と巨大な俺たち。作り物の街に馴染む自分。強いショックを受けても、おかしくはない。彼には、休息が必要だ……」

違う、と僕は怒鳴りたかった。僕は正常だ。断じて、狂ってなんかいない。あそこに見える物は本物なんだ。だけど君らには見えなないんだ。縮小世界とこの世界の相対的關係、超越者、現実を侵食する嘘、これは嘘か、現実か。それを知らない君らには、絶対に見えないんだ。でも僕は、知ってしまったんだ。僕には見えるんだ。僕を見ている。僕は見られている。

晴れ渡った青空に、巨大な一ツ目が浮かんでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1377f/>

---

縮小世界

2010年10月8日14時07分発行